様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００２１５

研究課題名（和文）美術館における社会的課題を踏まえた子ども対象のアート・プロジェクトのモデル化

研究課題名（英文）Modeling art projects for children in museums based on social issues

研究代表者
神野　真吾（Jinno, Shingo）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０４３１７３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会とは独立した自律的領域として近代以降規定されてきた美術（アート）が、社会との関りから捉えなおされる機会が増え、社会との関係が重要視される状況の中、子どものアート教育において社会的視点をどのように推進できるかを美術館雄活動として考えようとするもの。研究を通して明らかになったことは、子どもたち個々の日常の経験とアート体験をつなぐことの重要性であり、これを深めていくためには美術館のアートのとらえ方についての課題、来館者に提供する経験の質の検討、学校と家庭を含めた日常における社会の位置づけなど多くの課題があることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文化芸術基本法の制定や、改正においてその精神を踏まえることが明記された改正博物館法などで、社会とアートの関わりが強調され、国立アートリサーチセンターなどが整備されているものの、実際の課題は日常の生活の中で常に社会を意識することが希薄で、アートへの期待はその状況では十分には発揮できない。これは教育においては、社会科や国語科などの教育の内容や、家庭における生活と社会との関りへの視点など、多くの課題を乗り越えなければならないため、社会そのものを変化させていくという翁目標と共に取り組まれなければ絵に描いた餅となってしまうということが明らかになったことが大きな成果であると考える。

研究成果の概要（英文）：This research is an attempt to consider how art museums can promote a social perspective in children's art education in the context of increasing opportunities to redefine art, which has been defined since the modern era as an autonomous domain independent of society, and the importance of its relationship with society. What became clear through the research was the importance of connecting children's everyday experiences with art experiences, and the many issues that need to be addressed in order to deepen this connection, such as the way museums view art, the quality of experiences offered to visitors, and the positioning of society in everyday life, including school and home. The museum's role in the everyday world, including schools and families, is to deepen this experience.

研究分野：Art Education

キーワード：Museum　Children　Society　Contemporary Att　Workshop

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

美術を含む芸術の領域は、近代以降、自律性を旨とし社会と切り離された存在として強く意識されてきた。1960 年代以降、芸術と社会、生活との境界を無くすことを新しい芸術活動の目的とする作家たちが増えていき、現在においては、社会と芸術、生活と芸術との関わりを無視した自律的芸術はむしろ少数派となり、さまざまな社会課題についての調査に基づいたリサーチベーストアートが主流となっていると言える。また、地域で行われるようになった芸術祭もまた、美術の展示空間ではなく、生活空間において作品を展開するという点において、芸術のあり方における大きな変容を迫ってきたと言える。

日本においては、いまだ芸術の自律性が広く支持されており、芸術大学等でのカリキュラムも、社会に関するものはほぼ含まれておらず、結果として社会に関する浅い視点に基づいた浅薄な作品が少なくなく、SNS を中心に、炎上するようなケースも 2000 年代以降散見されるようになっている。

美術教育もまた、国の大きな教育方針のもと、社会と接続された教育内容がすべての教科に求められている。また、美術館もまた、現代アートを広く扱うようになりつつある中で、社会との関わりを強く求められるようになっているが、美術館学芸員もまた美術の自律性を前提とした教育を受けてきた者が専門職として勤務し、その期待に十分に応えられているとは言えない。社会と芸術の接点についての議論も低調であり、多くの実践が不十分なものであると言える状況にある。

社会のさまざまな課題と芸術実践の関わりについての理論的、実践的な整理が求められている。

２．研究の目的

本研究では、上記の前提をもとに、①子どもを対象とし、②社会的課題を踏まえた③アートプロジェクトの実施④その成果と課題の検討を目的とした。研究代表者は、「社会の芸術フォーラム」を 2015 年～2017 年度に共同代表として主宰した。その中で社会学者をはじめとする他領域の研究者やアーティストと共に、アートと深く関わる社会の課題について問題提起をし、議論をしてきた。その成果を生かし、子どもを対象としたアートプロジェクトの企画立案、実施と検証をすることで、社会と芸術の関わりについての新たな視座を構築することを目指した。

３．研究の方法

方法としては、以下のプロセスで３プロジェクトを実施した。

①これまでの研究、実践を踏まえた課題の整理
②先進事例のリサーチ
③プロジェクト内容の検討と企画
④プロジェクトの実施
⑤その成果と課題の検証

2019 年度は①②のリサーチに充て、社会と芸術の関わりの先端事例の多いイギリス、ロンドンを訪れ、V&A 子どもミュージアムやテートモダンの活動を視察、ヒアリングし、国内の事例の調査も行った。

2020 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大という事情があり、子どもを対象としたプログラム実施は不可能な状況であったため、前年度の調査の内容の整理と議論を行った。

2021 年度と 2022 年度には子どもを対象として③④⑤に取り組み、2022 年度にはシンポジウムも開催した。

2023 年度は、それまでの成果を生かし、一般的な子どもの制作活動に社会的な視点を課すことによる変化を検証することと、大学生による美術館の社会性の評価プログラムを実施した。その成果は、今後書籍、論文等で広く発表する計画である。

４．研究成果

本研究の研究成果として挙げられるのは、社会的課題は、多層的であり、さまざまな要素と複

雑に絡み合っているため、それらの関係性が浮き彫りになり、かつまた、その当事者(大人も含め)の認識を共有することなしには、社会的課題を踏まえたアートプロジェクトは成功しないという点である。善悪二分論をテーマとした 2021 年度のプロジェクトの進行の中では、関与するさまざまな存在とのやりとりを通じて、その核にある他の問題が表面化し、子どものみならず大人にとっても新たな気づきが得られるという実践の成果が得られた。

ただし、この成果は、課題に関係する者の積極的な関与を広く求めざるを得ないため、実践の難易度は高い。少人数の参加者を被験者としたパイロットモデルとしては成功したものの、これをどのように一般化するのかについては、課題が残された。

2022 年度は、そうした課題を踏まえ、より多くの子どもたちを被験者(プロジェクト参加者)とし、「社会参加」「自己主張・表現」を主軸とした内容とした。このプロジェクトでは、主張に関わる他者の関与は求めていないため、複雑な構造はなく、シンプルなプロジェクト構成となったため、難易度はそれほど高くなかったが、一方で、子どもの主張のその先にあるさまざまな社会的関係性にまでつながるような深みはあまり見られなかったと評価している。

社会の課題をどのように理解し、その中の何を実感を持って理解することを求めるのかを明確にした上で、プログラムを企画、実施することが求められる。

2023 年度その「何を」という観点が、美術館の活動ではどのくらい意識されているのかを、大学生に検証させるワークショップを実施したが、そこで明らかになったのは、美術館の考える子どもと、実際の子どもの実態とが乖離していることであった。

社会の課題を踏まえ、その活動で何を獲得させるのかを明確化した上での事業立案、実施が重要である。そのためには、芸術以外の領域で行われてきた社会課題についての研究や実践について、リサーチをし、活動を通して焦点化されるべきものを具体化することが、必須のこととなる。また、そのプロセスの中で生じた想定外の課題についても重要な成果とみなし、そのことへの視点も付加してプロジェクトの方向を柔軟に変更していくことも、アートのプロジェクトとしてはとても重要かつ意義があることも確認した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 神野真吾	４．巻 10
２．論文標題 ゲルニカで体験する戦争	５．発行年 2022年
３．雑誌名 武蔵野樹林　10号	６．最初と最後の頁 82-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 縣拓充、神野真吾	４．巻 42
２．論文標題 美術館での鑑賞教育プログラムが児童にもたらす学習効果 ―大学・小学校・美術館が連携した実践から―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 美術科教育学会誌	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 神野真吾	４．巻 8
２．論文標題 美術の鑑賞＝感性に基づく価値判断	５．発行年 2021年
３．雑誌名 武蔵野樹林	６．最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 神野真吾	４．巻 9
２．論文標題 文脈を知らないと作品はわからない	５．発行年 2021年
３．雑誌名 武蔵野樹林	６．最初と最後の頁 86-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 縣拓充、神野真吾	4．巻 42
2．論文標題 美術館での鑑賞教育プログラムが児童にもたらす学習効果	5．発行年 2021年
3．雑誌名 美術教育学	6．最初と最後の頁 pp．1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 神野真吾	4．巻 5
2．論文標題 色と形の曖昧さ、その危険性と可能性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 武蔵野樹林	6．最初と最後の頁 pp.84-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 色と形を超えて見る	4．巻 4
2．論文標題 武蔵野樹林	5．発行年 2020年
3．雑誌名 武蔵野樹林	6．最初と最後の頁 pp.78-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 神野真吾	4．巻 1
2．論文標題 食とアートにかかわる教育的アート・プロジェクト	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代アートにおける創造的行為としての「食」の研究	6．最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 神野真吾
2．発表標題 鑑賞と社会の関係　ゲルニカを例に
3．学会等名 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修
4．発表年 2022年

1．発表者名 神野真吾
2．発表標題 「虚」と「実」から考える鑑賞教育
3．学会等名 独立行政法人　国立美術館（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 神野真吾
2．発表標題 美術／アートにおける虚と実
3．学会等名 諸橋近代美術館（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 神野真吾
2．発表標題 社会の変化とアートの（キーノートスピーチ）
3．学会等名 美術科教育学会（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 神野真吾
２．発表標題 鑑賞と感情　「不寛容の時代」と美術／アート
３．学会等名 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 小松佳代子、神野真吾、縣拓充ほか	４．発行年 2022年
２．出版社 Brill	５．総ページ数 264
３．書名 Arts-Based Methods in Education Research in Japan (Arts, Creativities, and Learning Environments in Global Perspectives, 7	

１．著者名 小松佳代子、神野真吾、縣拓充ほか	４．発行年 2022年
２．出版社 Brill	５．総ページ数 264
３．書名 Arts-Based Methods in Education Research in Japan (Arts, Creativities, and Learning Environments in Global Perspectives, 7	

１．著者名 佐藤真帆	４．発行年 2022年
２．出版社 学術研究出版	５．総ページ数 181
３．書名 子どもの表現とアートベース・リサーチの出会い（ABRから始まる探究（2）初等教育編）	

１．著者名 佐藤真帆	４．発行年 2022年
２．出版社 学術研究出版	５．総ページ数 175
３．書名 アートベース・リサーチがひらく教育の実践と理論（ABRから始まる探究（1）　高等教育編	

１．著者名 神野真吾	４．発行年 2019年
２．出版社 美育文化協会	５．総ページ数 352
３．書名 美しい未来を創る子どもたち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐藤　真帆 (Sato Maho) (30710298)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	縣　拓充 (Agata Takumitsu) (90723057)	千葉大学・大学院国際学術研究院・特任講師 (12501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関